

昭和初期、北町谷川地域の桑畑や毘沙門塚^{こうずか}辺りから、好事家により石器や土器破片などが発見され、縄文時代の遺物の散布地として知られるようになった。

梁川・南本町の丹野栄七氏（昭和17・2・10没）が収集記録された資料や先見の明に満ちた論文が残されている。

当時は、埋蔵文化財などに対する法律や制度もなく、遺物や遺跡の消失が危惧^{きぐ}される面があった。

昭和25年「文化財保護法」が制定され、その後の文化財保護は目覚しく進展し埋蔵文化財にも及んだ。

長さ3.15m県内でも最大級で、川石を美しく積み上げた技術も見事である。小さな炉もあり4基出土。埋設土器は火種を保存する役目があった。

平成4年、並松土地区画整理事業が計画されたことによる発掘調査があり、結果、東西に舌状にのびる河岸段丘上から、平安時代の焼失家屋や溝とともに土師器・須恵器^{はじき すえき}などが出土している。

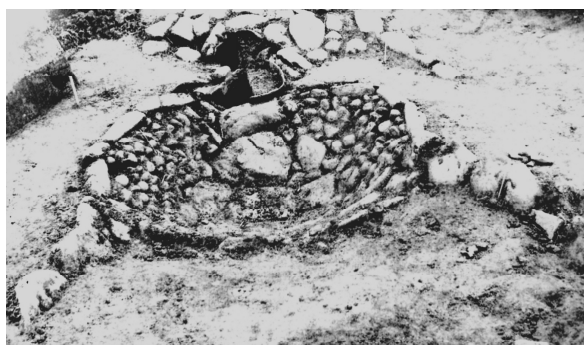


復元した土器

町谷川遺跡での発掘調査

昭和57年、新道路工事にともなう発掘調査（福島交通駐車場東側）が行われ、縄文時代中期後葉の複式炉・石組炉とともに、土器・石器が出土した。

複式炉の構造は、土器を埋設した部分と石組炉の部分と木尻りと考えられる掘り込みの部分からなり、縄文時代を通じて最も発達した炉といわれ東北南部に多い。



複式炉（県内でも最大級、川原石を利用）

縄文時代の特色

○ 土器の制作

粘土をこねて容器の形をつくり、火で焼くとまったく別もののような色と堅さとが生まれでる。すぐにひび割れることもなく水を入れて火にかけることもできる。

土器という大発明により、ものを煮て食べることもできる。これまで困難であった山菜・球根などの植物やきのこあるいは魚介類など、食料としての対象が幅広く増やすことができた。貯蔵や運搬その他の用途で形も文様も工夫され、変化し発展した。その技術はすばらしい。

○ 火の利用

人間は、火に近づき、親しみ、活用した。食物の調理はもちろんのこと、猛きん類からの防御、暖房、照明、道具づくりなど広

く活用した。

生活の根拠となる竪穴式住居では、火を絶やさない、火種の保存に配慮がみられる。炉を囲み、寝食を共にする間柄はきずなを深くする。

○ 暮らし

縄文時代の人々は、木の実を集め、鳥やけものを狩り、魚介類などをもって食物としたが、風雨の激しい日、厳しい冬の季節、自然災害など、環境の変化によって左右されやすい不安定さがある。

縄文中期には、クリ・クルミ・トチなどの堅果類の貯蔵と加工が工夫され、乾燥・くん製も行われて定住集落も形成されたといわれる。石の矢じりは縄文全期間を通して発見されているが、このことは弓矢による狩猟がどれほど重要な生業であったか推定できる。

町谷川遺跡は周辺を阿武隈川・広瀬川・塩野川が流れ、川漁や産卵期にのぼる鮭の漁にも便利な位置である。北町谷川32の畑地で出土した土錘^{どすい}などから網も使われていたと考えられる。また、狩りや採集の場となる阿武隈山地の丘陵が東側につらなっている。河川の合流する近くで、他地域との交流・交易を行うのに分かりやすい位置でもある。

○ 交流・交易

いつの時代もそれぞれの時代のことからを反映しながら道は開かれ利用されてきた。梁川町域には60以上の縄文遺跡が確認されている。他地域への交流・交易の道はどのように発達したのだろうか。

動物はけもの道をつくる。人々は狩りや

漁や採集のため、けもの道を利用したり、往復に一定の場所を通り何度も歩くうち、踏み分け道ができる。やがてこの道は食物探しだけでなく、他地域との交流・交易へと延びる。道は共有でありどこへも通じている。

○ 信仰

北町谷川地域から土偶頭部が出土している。東大枝の林正寺遺跡からも女性を形どったもの、土偶の足と思われるものが出土している。土偶は土で人間や動物を形どったもので、女性をあらわすものが多い。豊かな生産を祈るためとか、土偶の多くが故意に破損されていることから、呪術や宗教的なことに使われたのではと*いふ*かわれている。

自然災害・死者への畏怖・病気・夜の闇・不思議な現象など、縄文人の生活には、それらに対応する呪いや祈りは切実なものがあつたろうと思われる。

○ 集落

食糧の獲得のためには、みんなで協力してあたらなければならない。そのことはただ沢山とるためだけでなく、さまざまな危険をさけるためにも必要であつた。人数を要する作業や話し合いも必要でそのまとめ役も出てくると思われる。

何はともあれ、縄文中期後半時代(4,000年以上前)に、この塩野川町内域に、人々が集落をつくり生活していたのである。